



1978-8

No.119

表紙 紙本銀地著色風雨草花図

酒井抱一筆

解説は23ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

「数寄」への道 林屋辰三郎 4

——言葉の習合現象——

こども芸術劇場、青少年芸術劇場の意義
..... 大木正興 7

国際シンポジウム

「日本仏教美術の受容と展開」報告 上原昭 10

小山の文化財 角井 宏 12

文化財の保護を展示で訴える 堀内保夫 14
——ユース・ホステルで新しい試み——

文化庁ニュース

文化庁創設10周年記念功労者表彰 16

国立文化施設整備調査研究会

第1回会議が開催される 18

第2回日本民謡まつりの開催 19

昭和53年度著作権講習会等の開催 19

昭和53年度（第3回）指定文化財展示取扱講習会
開催について 19

〔紹介〕

韓国の文化行政、瞥見 大家重夫 20

——文化公報部の機構——

民俗歳時記シリーズ 8月

盆 新谷尚紀 22

我が県の文化行政

埋蔵文化財保護を中心とした

群馬県の文化行政 磯貝福七 24

文化財保護法教室（19）

史跡名勝天然記念物（Ⅲ） 27

美術館・博物館・文化施設めぐり⑮

国公立では初めての近代美術館 30

——鎌倉近代美術館——

国立劇場ニュース 31

こども芸術劇場、青少年芸術劇場の意義



十歳から十三歳のこどもを対象とした「こども芸術劇場」と、学校生徒を含む一般青少年向きに企画されている「青少年芸術劇場」とは、いずれも大きな成果を挙げているようです。そのことは公演後に書かれた児童・生徒のいきいきと感動を伝えた感想文を読んでもよくわかります。もちろん反応があまり顕著でないところもあるかもしれませんが、更にすすんで批判的な、あるいはそっぽを向かれたような場合も皆無とはいえますまい。そういう方面のことはあるいは正直に私たちの耳には届きにくい仕組みになっているのかもしれないということが、気がかりではありますが、ともかく多数のこどもや青少年の胸に、芸術志向の灯があかあかと燃えはじめているのを、私たちが確認するにたる資料は思いのほかたくさんあるのです。私自身もすでに何回かオーケストラとともに

大 木 正 興

(音楽評論家)



出かけ、東京など大都会の聴衆には考えられないような不向きな会場でこの催しがおこなわれている現場に立会ってきましたが、全身の神経を目と耳とに集中し、かたわらで見ている私のほうがそれら居並ぶ顔たちがいまにも爆発でもおこすのではないかと思われるほど好奇と興奮に充滿しているのを感じて、ほとんど例外なく恐ろしいような気持ちにさえなったものでした。集められた感想文などを読んでみると、こどもや生徒たちの受取りかたはきわめて多様で、私たちの思いもおよばないところに着眼しているのに驚かされもし、また笑いを誘われることさえ少なくありません。例えばオーケストラの演奏では、楽員の演奏中の譜のめくり方まで強い関心の対象になっているし、指揮者の動きには実に多くのこどもたちが魔法使を連想しているのです。しかし、そのような私たちの微笑を

誘うようなこどもたちのオーケストラとの触れあいのかたを、私たちは決して蔑視してはならないのです。なにしろ彼らの眼のまにに展開された風景は、その会場や周囲の環境条件がどんなに不備なものであれ、人間の芸術的営為の中枢に位置するものでありますから、いままでまるで、あるいはほとんどそのようなものの現場に立会ったこともない心が、いきなりそれらを全面的に受容できるような姿勢をとるのは、期待するほうがおかしいと言わねばなりませんまい。

私たちがその現場にいつも強く期待するのは、その行事がともかく彼らの心にひとつの確実なショックをあたえることであり、それが機縁となって将来の彼らの芸術への目覚めにつながってゆくことです。まず種子が播かれなければならない、そして発芽を待つというわけです。もちろん人間のもって生まれた資質も環境も多様ですから、このような行事によってすべてのこどもや青少年たちに、確実に演劇、バレエ、音楽等への関心がひとしく昂揚してゆくとは思われません。現下の教育では各分野とも採点によって能力が評価されますので、母親たちは作文でも音楽でも、そして美術でもひとしく点の高いいことを望むようですが、人間の才能というのは元来そんなに便利にできているわけはなく、だれも多かれ少なかれ得手不得手はあるものです。

しかし、だから多くのこどもや青少年がひと

しく音楽会なら音楽会に集まってそれをきくのは意味が薄いということにはならず、むしろそのことゆえにだれもが音楽の世界でなにがどのようにおこなわれ、そしてそこでどれだけのひとがどれだけ深くその仕事に打ち込んだり、それをきいて感動しているかを、まさに彼ら自身の眼で確かめておく必要があるといえましよう。なまのステージの大きなショックが、たとえどんなところから発生したものであるにせよ、それは幼く若い心には、日常のほとんど決まった生活のなかではとうてい体験することのできない重大事件としての重みをもつものです。その重みの効果を、すぐにだれをも音楽好きにしでしめようとか、まして音楽家志望者を生み出そうとかいうことに短絡させてしまうのが誤りであることはいまでもありません。音楽会をききにきた子どもたちのうち、将来おとなになつてまで生活のなかで音楽と親しんでゆくひとは当然限られてくる。これは音楽だけの話ではなく、文学や美術すべて同様です。ただ、最も重要なことは、自分個人の適性や趣味とは異なるところでおこなわれている人間の芸術的営為が、それぞれ人間にとってまさに必須のものとしての存在意義をもっていることを、身をもつて知ることの強い契機がこういうところであたえられるということです。それは文字通り契機、つまり将来のものの考え方への口火であることだけでも、十分すぎるほどの意味をもつ

商品としての芸術に馴れてしまったこともや青少年が、その本質とはいささか違うところでそれらを娯楽のなかに組みこんでいる例は少なくありません。音楽で例をとれば、それぞれが自室の勉強部屋のなかで放送電波を録音し、その蒐集を誇りあうというようなことの流行もそのひとつに挙げられましよう。また少し長ずればレコードを買ひ集めて、やはり個室にこもつて世界的名演奏家の演奏に耳を傾けるといように、早くも珍妙なスノビズムのなかに埋没している芸術青年も少なくありません。彼らにとって音楽とはいも眼のまえに生きている人間の営みなのではなくて、テープや円盤の中に封じこまれているものなのです。スピーカーという紙製品の振動によつてきこえてくるもののなかだけに音楽があるのです。すべてはモノが先んじ、そのモノが十分な機能を發揮するために音楽が存在するというわけです。

そういう世のいきおいをバックにして、学校教育の現場で、先生たちがどんなにか多くの苦勞を重ねているか、おそらく想像に絶するものがあるかと思いますが、私自身もごくまれに機会があつて、そういう方々とお会いし、ご苦勞の一端を察知することもあります。その際にやはりいしばん痛切な問題は、現に生徒たちが実践している初歩的な芸術の楽しみに対して、人類的規模でみる壮大な芸術の高嶺とがどうしも結びつかず、一方を立てれば一方が反感さ

のと考えなくてはなりません。

およそこの国においても、その国の芸術文化はその国民の関心と理解のうえに成りたつているものです。この場合の関心と理解というのは、日常的に興味として強く心をひかれていとか、あるいははもとと進んでだれもが豊富な知識をもっているとか、または専門家がたくさんいるとかいうことではなくて、人間がどうしても保有所持しなければならぬと考えてもちきつた芸術が、自分の現在の好悪をこえてかけがえない価値をもつものであることを、観念的にではなくて、もつと直接体験的に知ることでしょう。実際、寄せられた多くの感想文のなかには、指揮者をはじめとする出演者たちが、最高度の緊張のなかで音楽をしている姿にたいへん大きな驚きを表明しないでいられなかつたものを見ることができます。と同時に、その驚きが自分個人にだけ生じたものでなく、自分を含む大きな集団のなかで、横にひろくつながる共同体験として存在していたということに気づいて、彼らの驚きは決して不確かな離島の孤立状態にあるのでないことが確認されているのです。このような状況は、ほかのあらゆる手段を通じて、彼らにとって体験は不可能といわねばなりません。

人間がどうして芸術というものにあれほどまでに深く打ち込むのか、それがステージに繰りひろげられたとき、それを見たりきいたりして

え買いかねないといえるくらいにかけはなれてしまふということなのです。これは私見では、合唱をしたり器楽合奏をしたりという実践派のほうで、どうしても芸術性というものから離れて、技術中心の浅い機械的満足に走り、いつぱう反実践派は観念的な芸術論を振りまわしたり、アマチュアの実践を頭から軽蔑したりという弊をおこしがちなものです。現在たいそうにぎやかにみえる日本の音楽愛好者の世界が、実際にはほとんどこの二派に完全に分割されていると私は見ています。そして、このことは前述の芸術というものの正しい評価がまだいちども成立したことがないという厳然とした事実とともに、最も残念としなければならぬところです。

この事態がなによつてひきおこされたのかといえ、それはおそらく若い世代にナマの芸術の現場が十分に提供されていないことを第一の理由に挙げてよからうかと思われまふ。心をゆさぶる人間的行為としてのなまなましい芸術体験を抜きにして、ただ書籍などをとおして芸術をわからせることは、どだい無理なことでありまふ。私自身も女子大学の美学の学生相手に音楽美学のゼミナールを担当しておりますが、驚くなけれ、オペラというものの実際の舞台を一回もみたことのない音楽好きさえ少なくないのが実情なのです。こういう話が実は一国の文化庁のパンフレットのなかに掲載されて、外国人の眼にでも入ったら、それこそとりかえしの

いる側がまたなんで忘我的にその虜になつてしまふのか、というような思いは、やがて彼らの成長の過程でさまざまな思索の糸のなかに繰り合はれてゆくでありましよう。このことは現下の日本では特別重く見る必要があろうかと思ひます。

というのは、こんにち芸術はその本来の生命を分断され、マス・プロの手段に乗つてこどもや青少年に毎日浴びるほど大量に提供されています。そういう環境に日常としかこまれていこどもや青少年にとつては、音楽もバレエも芝居も、すべては商品の一種であるか、あるいは向こう側から頭を下げて来訪してくれる見世物でしかないのです。社会の仕組の建て前は変つたといふものの、昔、芸術が芸能としてしか通用しなかつた時代のものの考え方は現代に深く潜行して、興味深いことに前述の新事態と底のほうでうまく手を結んでしまつていようようにみえます。こうなると万事が改善され、ものごとが正しい方向に向いていようようにみえても、こと芸術に関しては基本的な国民の通念の本音は、実質的にはその価値を正しく認識することがついになかつたといつても、決して過言ではないと思われまふ。

ここで日本という国は静かにわが胸をたたいて、その本音に耳を傾けてみる必要がありはしないか、とさへ私は考えまふ。

さて、マス・プロ的産物としての、あるいは

つかない恥辱でありますから、本当は書かないでしまつておくべきかもしれまふが、文化といふものの仮面がこういう工合であるということとを申したいばかりに真実を書きました。

私たちの後輩が、たとえ芸術というものに対して過去の人々よりもはるかに利発になつたとしても、実体験のショックから生まれ育つたものをもつていない限り、そのうゑに建てられたすべてのものはわれわれの生活の基盤のなかには取まらずまい。それは彼らにとつてもやはり近日中に全く空しい努力の積み重ねであつたことを気づかせ、やがてはそこから遠のいてゆく結果を生むことにはなりまふまいか。

芸術劇場の意義というたいそう正面きつたタイトルをあたらえられながら、どうも私の筆はいぶ迂遠なところを漂流してしまつたやうです。しかし、こどもや青少年のなかになにか芸術的な出来事を待ちに待っているものが存在することとがたしかである限り、それに少しでも多く応えるのは私たちの義務であり、その面で私たちがどれほど貧しく寂しく、そして結果的にはダメな世代に仕がつてしまつたかといふことを振り返つてみるのがたいへん重要であるといふことをもつちと強調して、現におこなわれているこの催しの意義を明確にしたいと思ひます。

国立劇場 ニュース

■民俗芸能公演

日本の太鼓

九月一日～九月二日
小倉祇園太鼓 福岡県北九州市小倉区
白河天道念仏 福島県白河市関辺
与瀬権現太鼓 神奈川県相模湖町与瀬
江之島囃子 神奈川県藤沢市江之島
下田太鼓 静岡県下田市
初午太鼓 埼玉県川口市
鬼木の臼太鼓 熊本県吉市鬼木
知床いぶきたる 北海道羅臼町
(大劇場)

■歌舞伎公演

限田春妓女容性

御存じ梅の由兵衛

九月九日～九月二十三日

●あらずじ
下総千葉家の家臣、金谷金五郎は、同藩三島準人の娘小さんとの恋仲が許されぬため、ともに故郷を出奔した。ちよとどその時、準人が預かっていた千葉家の重宝「手向山」の色紙が紛失したので、あらぬ嫌疑のかかった金五郎は芸妓に身を落とした小さんともある色紙の詮議をしている。準人に旧恩のある俠客、梅堀の由兵衛は、持ちまゑの義侠心もあって金五郎のこの探索に協力する。
一方、何かにつけて由兵衛と俠者の覇を争う源兵衛は、由兵衛の女房小梅に惚れていることもあって、千葉家の悪侍曾我伴五郎の頼みを引き受け、乞食の十平次と謀り、小さんの身請け金

に苦慮する金五郎に偽金を貸して、彼を偽金遣いに陥れる。

また、小梅の弟浅次郎は長吉という名で、蔵前の米屋佐次兵衛の家に下種奉公の身だが、金五郎たちの金の工面を姉から頼まれ、苦心の調達金を届ける途中、大川端で由兵衛と出会う。由兵衛はその金を借りようと頼むが、義兄の顔を見知らぬ長吉は長吉で、姉婿の難儀を救う金ゆえと承知しない。争いの中で、遂に由兵衛は長吉を殺して金を奪う。一方の小梅も夫が長吉殺しに至った事情を悟り、夫の罪を負おうと覚悟し、離縁を申し出る。
そして、遂には由兵衛は、悪人の源



限田春妓女容性(錦絵) 一 御存じ梅の由兵衛

兵衛・伴五郎・十平次らを斬って色紙を手に入れ、金五郎・小さんも無事に千葉家へ帰参がかなうのである。
●かいせつ

きつぷがよくて、強きをくじき弱きを助ける正義漢というのが、いつの世の中でも庶民のあこがれの英雄像といえるが、士農工商とひときわ身分制度の厳しかった江戸時代では、花川戸の助六・幡随院長兵衛・御所五郎蔵といった俠者が、そのさつそうたる舞台ぶりで歌舞伎に登場し、観客の喝采をあげてきている。群鳥を鮮やかに染めあげた勝色の衣裳に紫頭巾、一本独鈷を

腰にして悪人どもをやつつける本篇のヒーロー梅堀の由兵衛も、そうした歌舞伎の俠者を代表する人物である。

シンボルのその紫頭巾は、旧主からその血気を戒める「勘忍の歌」を織り込んだ品という趣向が働いており、それが悪人とわたりあう由兵衛の悲痛さを一層増すという、まことに花も実もある展開となっている。

梅沢吉兵衛という人物は、元禄期の大阪に実在した人物と伝えられている。長吉という少年を修殺して金品を奪い、深井戸へ隠しておいたのがばれて処刑されたという、今日でも見られる陰惨なニュース種を、このような義理と人情に厚い俠客仕立てにしたところに、作者並木五瓶と主演者三世澤村宗十郎の卓越した手腕があつたといえる。最近の東京では、先代中村吉右衛門の当たり役として、その前半部分がしばしば上演されていて、おなじみの方も多いと思われる。

今回は、その宗十郎の由兵衛に田之助・藤十郎ら当狂言にゆかり深い俳優さらに、我当・段四郎ら現歌舞伎界で活躍する人気俳優の参加を得た好キヤストで通し上演する。

■邦楽鑑賞教室

義太夫節の味わいかた

九月四日

(小劇場)

■舞踊鑑賞教室

歌舞伎舞踊の仕組みと技法

九月二十九日

(小劇場)

編集後記

○夏休みの間に全国各地を巡回する「子ども芸術劇場」と「青少年芸術劇場」の評判はすこぶる高い。文化庁が、優れた芸術を鑑賞する機会を地方の子どもや青少年に提供するため、一流の出演者や団体に委嘱して公演をするものであり、毎年それぞれ八十か所程度を巡回している。オーケストラ、歌舞伎、バレエなど初めて接するものが多く、子どもや青少年の生き生きとした表情がみられる。数年前からは、特にへき地、離島などにも足を延ばしている。これが一つの契機となって、民間レベルや地方公共団体でも同様の公共事業が増えてきている。本号では、大木正興先生に子ども芸術劇場と青少年芸術劇場の意義を解説していただいた。(K)

広告の問合せ、申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)二六八二一四(代表)

「文化庁月報」 八月号

(通巻第二一九号)
昭和53年8月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号
営業所 千代田区新富区西五軒町52番地
電話(03)二六八二一四(代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 (財)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円